

理科教室の黒い影

放課後の校舎は、静かになにかしらさむぎむしい。ときどきどこかの教室のとびらのあけしめされる音がだれもない廊下にうつろにひびく。講堂のピアノでだれかがショパンのポロネーズをひいていた。三年の芳山よしやまかずこ和子は、同級の深町ふかまちかずお一夫、浅倉あさくらごろう吾朗たちと、理科教室のそうじを終えた。

「もういいわ。ゴミはわたしが捨ててくるから、あなたたち、手を洗っていらっしやい」
「そうかい、すまないなあ」

一夫と吾朗は、並んで手洗い場へ行った。ふたりのうしろ姿を見くらべた和子は、また、笑い出しそうになった。かれらの組みあわせはじつにおもしろい。一夫は背が高くやせ型。吾朗はずんぐりむっくりである。どちらも勉強はよくできるが、吾朗は努力家で、どちらかといえば直情径行型。それに反して一夫は夢想家型だ。ぼんやりのようににも見えるし、なにを考えているかわからない、きみ悪さが感じられるときもある。

トイレットで手を洗いながら、吾朗は一夫を見あげていった。

「芳山くんというのは、やさしくてかわいいけど、少し母性愛過多なんじゃないか？」
吾朗は氣どつてむずかしいことばを使おうとするくせがある。一夫は、あいかわらずぼんやりした目で自分より二十センチは低い吾朗を見おろした。

「ふうん、どうして？」

「だって、君はそう思わないか！」

吾朗は胸をそらしていった。まっかにふくらんだ顔のため、しょっちゅうりきんでいるように見える。

「芳山くんは、まるでぼくたちを、赤んぼうみたいに思ってるようだぜ。ふん！ 手を洗っていらっしやいだとき！」

「そうかなあ……」

一夫は、夢みるような目つきのまま、ぼんやりとそういって、のろのろと手を洗いつづけた。

校舎の裏庭にゴミを捨て、理科教室にもどった和子は、そうじ道具をしまおうとして、隣の実験室へのドアに手をかけた。この理科実験室というのは、理科の教材をおいてあるへやで、ドアは理科教室へ出るのと、廊下へ通じるのと二つある。和子が開こうとしたの

は、理科教室からのドアだった。

「おや？」

和子は、ドアのとつてをにぎったまま、ちよつとあけるのをためらった。実験室の中になにか物音がしたからである。

実験室といつても満足に理科の実験ができるようなスペースはほとんどない。まるで物置きべやのように、いろんなものがごちゃごちゃに並べてあるだけだ。しかも、それが、いろんな生物の標本だとか、骨格の模型だとか、剝製はくせいだとか、薬品戸だなどとか、あまり気持ちのよくないものばかりなのである。和子は平気だが、女生徒の中には、このへやにはいるのをいやがる者もいた。

「おかしいわ、だれもいないはずなのに……」

和子は声に出して、そうつぶやいた。

「福島先生かしら？」

——いや、そんなはずはないと和子は思った。福島先生なら、さっき実験室から廊下へ出て、そのドアにかぎをかけて帰るのをたしかに見たのだ……。いったい、だれだろう？ 和子は少しきみがわるくなつたが、思いきつてドアを開いた。

ガチャーン！ ガラスの割れる音がひびいた。

「だれ？ そこにいるの……」

うす暗いへやの中を和子は目を細くして見まわした。へやのまん中にある机の上に、試験管が並べてあり、その中の一つが、床に落ちて割れていた。そして床の上には、試験管から流れ出たらしい液体がこぼれ、かすかに、白い湯気のようなものをたてていた。

——だれかが、なにかの実験をしていたのだわ……。でもだれだろう。どこにいるのかしら……。？ そう思いながら和子が、試験管といっしょにおいてある薬びんのレットルを讀もうとして、机に近づいたときだった。黒い影が薬品だなのうしろからパッととびだして、廊下へ出るドアの手前の、ついたての向こう側へとびこんだのである。

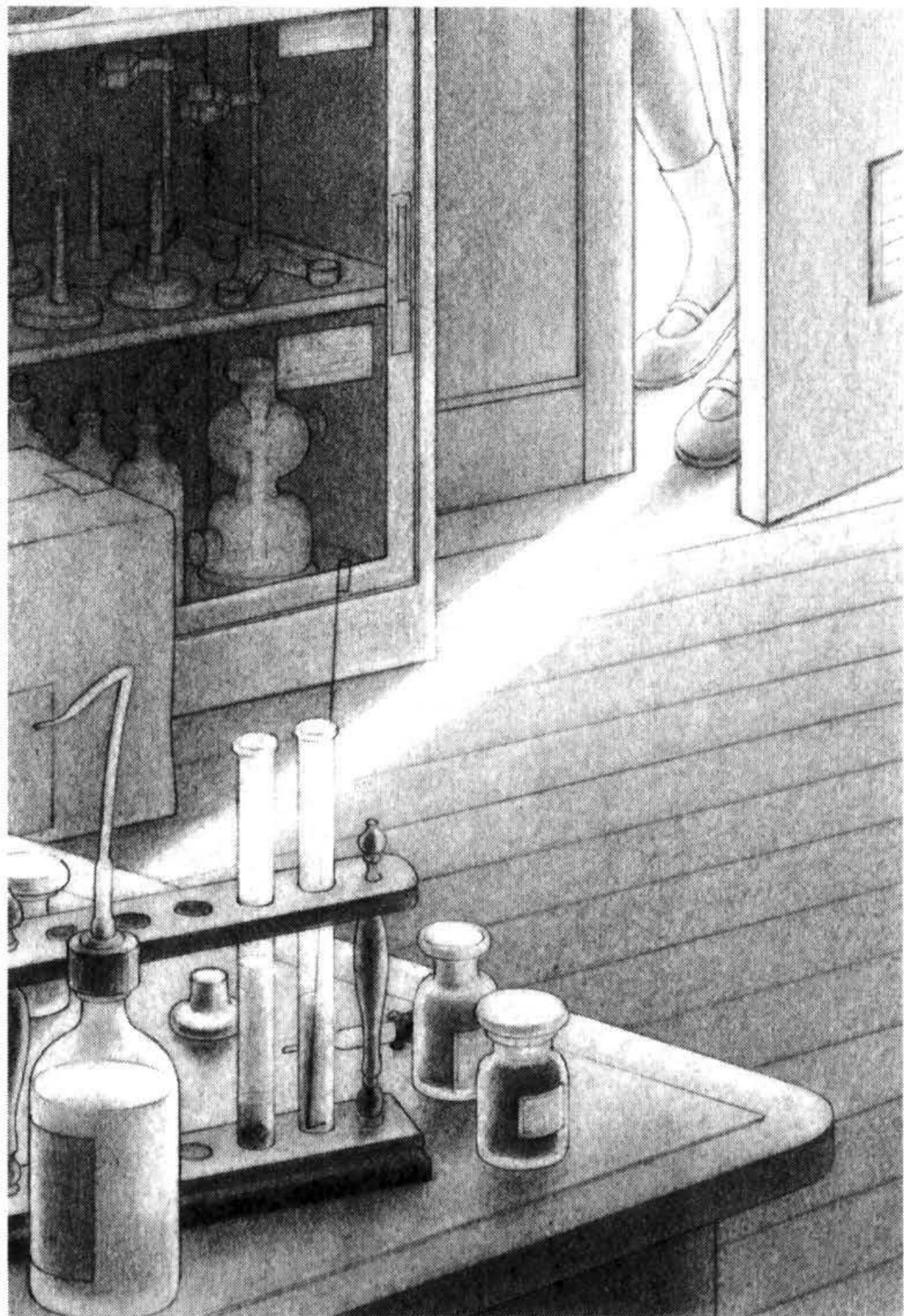
「あっ……」

——どろぼうかしら？ かの女はしばらく、身をかたくしてたたずんだ。手足がしびれたようになって、動かなかった。

「だれなの！」

たまりかねて、かの女は叫んだ。

「びっくりするじゃないの！ 出ていらっしやいよ！」



廊下へ出るドアがガタガタと音をたてた。

「廊下へ出ようとしたって、だめよ！」

和子はついたての向こう側へ叫んだ。

「そのドアには、かぎがかかっているんだから！」

なにか叫びつづけていなければ、こわさのあまり、気を失ってしまいそうだった。やがてドアは、音をたてるのをやめた。ついたての向こうからは、コトリという音ひとつ聞こえてこなくなり、へやの中はひっそりと、ぶきみに静まりかえった。

「わかった！ 深町さんでしょう？ それとも浅倉さん？ わたしをおどかさうとしているのね？」

和子は、足音をしのばせ、ついたてのほうにゆっくりと歩きながらいった。だが、ついたての向こう側からは、あいかわらず返事がない。和子はぐっとこわさをおさえつけ、おそるおそる、ついたてをのぞきこんだ。そして思わず叫んだ。

——あっ！

そこにはだれもいなかったのだ。